トマト黄化葉巻病（病原ウイルス：*Tomato yellow leaf curl virus*（TYLCV））

○ 被害と発生生態

発病初期は、新葉が葉縁から退緑しながら葉巻症状となり、後に葉脈間の黄化・縮葉、生長点付近の節間短縮が生じ、株全体が萎縮する。発病後は開花しても結実しないことが多いため減収する。

本病は、タバココナジラミ類によって永続伝搬する虫媒伝染性のウイルス病で、全身感染する。接ぎ木伝染するが、種子伝染・汁液伝染・土壌伝染はしない。トマト、ミニトマト、トルコギキョウ等の作物の他、ナス科、キク科等の雑草にも感染するが、その確率は低く、トマトからトマトへの伝染が主な感染経路である。

○ 防除方法

（ア）耕種・物理的防除

・発病株は伝染源となるので、見つけ次第抜き取り、適切な方法で処分する。ほ場内だけでなく、ほ場外の野良生えトマトも併せて処分する。

・媒介虫の侵入・拡散を防止するため、育苗ほ、本ぽともにハウスの開口部に防虫ネット（0.4mm 目合い以下）を設置する。

・雑草は媒介虫の生息場所となるので、ほ場内および周辺の除草を徹底する。

・収穫終了後は、本病発生の有無にかかわらず株を地際から切断または抜根し、直ちにハウスを密閉して植物体を乾燥・枯死させ、媒介虫をハウス内で死滅させる。

・地域内で１ヶ月程度トマトの作付けを中断する期間を設け、ウイルスの伝染環を絶つ。

（イ）薬剤防除

・育苗期後半または定植時に粒剤を施用し、媒介虫の発生を抑制する。

・黄色粘着板を設置し、媒介虫の早期発見に努め、発生を確認した場合は、直ちに防除を実施する。

・タバココナジラミ類は野外で越冬することが困難であり、冬季は施設内のみに存在すると考えられるため、冬季に薬剤散布を徹底する。

・タバココナジラミ類は合成ピレスロイド剤、ピリプロキシフェン剤、一部のネオニコチノイド剤のに抵抗性が発達している可能性があるので、他の薬剤を用いて防除する。トマトでは、ジノテフラン剤（スタークル剤、アルバリン剤）、ピリダベン剤（サンマイト剤）、ニテンピラム剤（ベストガード剤）の防除効果が高い。

株全体の萎縮
（開花・結実していない）

生長点付近の節間の短縮

葉脈間の黄化・縮葉